

婦人と子ども

第八卷
第九號

フベール會發行

第八卷第九號目次

- 無心の感化 和田 藏子
- 兒童の個性及び其取扱法 松本 孝次郎
- 大器は晩成 下田 歌子
- 兒童の詐に就て 尾田 信忠
- 子供をして勞作を重んぜしむべし 雨 峰 生
- 家庭に於ける趣味の涵養(其三) 川口 孫治郎
- 活動と元氣の養成 樂 天 子
- 余がノート(二) 大元 茂一郎
- 洗濯の仕方 丸 山 芳子
- 夏の月 かは ぐ ち
- 蒟蒻料理 石井 泰次郎

投稿募集

●か 御 話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
 一種類 選擇の上本誌に載録せるものは
 ●一般記事 内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取
 らずして其指定する人に本會より直接送ることを得
 一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字請にて半紙又は郵紙に書
 かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
 月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に同はし何時迄も引續いて
 行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。
 開き封で應募原稿と標記すれば三十日迄は郵税二錢で参ります。

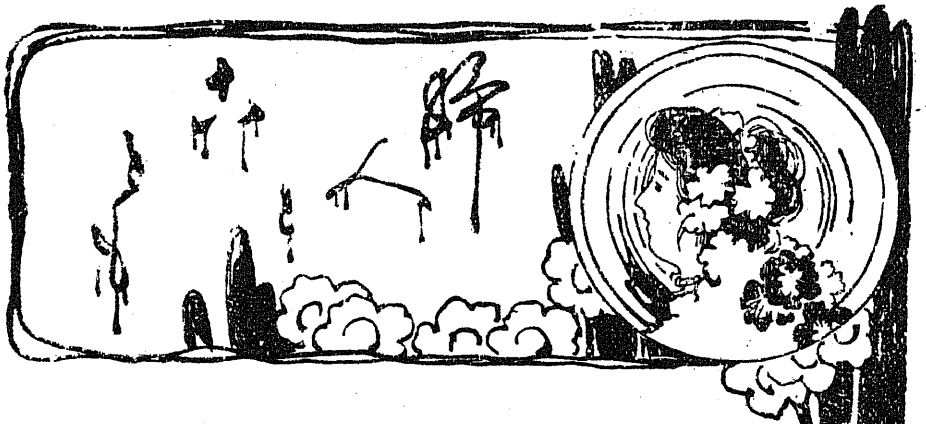
質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する
 事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
 に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾圓の割合で一ヶ年
 分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致
 します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會
 か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい。

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増



第八卷第九號

無心の感化

和田 織子

樹木の嫩なる時は、殊に其の培養に注意し、曲れるは矯め不用なるは折り、出來得る限りの力を盡してよき花を咲かば又實を結ばせたいと誰しも希望いたしまし、兒を育つるも亦同じ理で何れの親も吾子に立身出世させ幸福を得させたいと望む所でありますが、父母たる者如何程注意して其の子供を養育すればとて、周囲の人々育兒の心得なき時は、折角の心盡しも、水の泡となり却て、膾炙には無形の怪我をなましむる事となりす。

私は、表題の一部分につき、少しばかり思ふ事を記し、愛讀諸姉の御批評を願ひます。

私の知己の家に、年齢僅か七才と五才との男兒がありまして、家内は老母と兩親と、年若き叔母と該兒等との水入らすの樂しき生活がなかつ居ります。其の兩親の老母に盡す孝養は、實に到れり盡せり、衣服飲食起臥動靜其他百般の事親の見習ひ、老母を大切にす、事一通りや二通りではなく、何時も送物の一部分は、僅かの小言も、老母の名をかりれば、忽ちさる者は、必ず見せしむるを常とし、僅か他人の私までも大に喜ばしく感しました。なほすといふ風で、老人を勞はる風は、他人の私までも大に喜ばしく感しました。

尙一つ思付ましたのは、其家の叔母が大部漢籍に委しいので、來客の人々に向ひ常に漢語を交へて應接いたし、時々耳障りに感ずる事がありました。果して、其兒は如何せう、兄は、一二年前より其詞を覺え、年齢不相應に、漢語を交へて談話をいたしました様になりました。

今前記二つの事柄を考えますに、前なるは、周囲の人々の生きた模範によりて、適當なる感化を受け斯る望ましき効果の表はれ、周囲の人に反し、後なるは、別に考もなく育て居るので、これは、家庭教育上大に注意すべき事と思ひます。

此時代には、摸する力強く、判する在る時は、何時ともなく感染し、事柄によりて、兒に對して云ふのではなくとも、傍に在る時は、何時ともなく感染し、事柄によりては、洗ひ去る事の難きに至る者です。故に、子供を世話する人々は、先づ自分から省みる事が大切ではありませぬか。

香やう

兒童の個性及其取扱法

文學士 松本孝次郎

詰り前號に御話した様に於て、調和的の發達をする様になる、専門的の教育になりますると自分の得意な長所とするところが餘計發達しても宜いのでありませう。其今日専門的の教育を受けるまでに進みまする間といふものは今日の學校の程度から言ふと普通學で普通の教育を受けぬければならぬ。その普通の教育を受ける間といふものは成るべく調和的の發達をして居らなければ能く普通教育を受けることは出来ないのです。昔の専門家は随分議論が少し普通の人は變つた人があつたのです。それは詰り其持つて生れた儘の個性をば唯其儘に長せしめたから或事柄には非常に長じて居るけれ共人間として見たならば奇？愚人であるといふ様な風になつて仕舞つた、今日の時代に於てはそれではいけない、愚人として生れて仕舞つては社會的の性質が無くなつて仕舞ふといふ譯

でありますから其社會的の性質を重んずるといふ心があるならばどうしても實際的の發達をさせて置いて其上に自分の個性の長じて居る方を餘計に發達させる方法にしなければどうしても當前の人間は出来ない様になるのです。尙、想像の材料といふもの、中に於て唯今御話しました眼で見たこと茲に耳で聞いた事を重りに材料として其様な性質の小供の外に尙能く一つ注意して置くべき事それは唯今御話した程に必要ではありませぬけれ共モウ一つ注意して置くべきことは筋肉の運動に訴へて得たる力を重りに能く覺へて居る事があります、それは少し大きくなつた小供等でありますると著しく分るのでありますが自分が或事柄を覺へやうと思へば必ず自分で以て手で書いて見なければ能く覺へないといふやうな小供があります、今或役所に勤めて居つて會計をやつて居る人でありまして餘程其役所では物の計算をするのに巧みで餘程調寶な人だと言はれて居る人で暗算で何でもやる人がありますけれ共暗算をする際にはどうしても指を動かして居らなければ暗算

が出来ない人がある、それらは矢張り此筋肉運動に訴へた方のことを能く覺へて居る性質の著しき場合なのです、或は表で以て兵隊が歩いて居るのを聞いても其兵隊の足はどれ位の方が這入つて居るか覺へて居る様な注意の出来る人はそれは詰り筋肉運動の方から來る事柄を多く材料として居る人であり、相撲を見て居つても其相撲に餘程面白味があつて相撲の身体にはどれだけの力が這入つて居るかを想像の出来る人は筋肉から來た材料を多く使つて想像をする人であり、或は大勢の人が一緒に居ります際にどうして。書物を讀む際に音讀をすることは許されない默讀をしなればならぬそれなのに矢張り口を動かして居る人は筋肉の運動に訴へたもので無ければ覺へられない、想像が能く出来ないやうな人であり、さう云ふ所に個性が表はれて居るので小供の中にも想像の材料とするのに筋肉運動に訴へたものだけ想像の材料にするといふ小供があります、是等は併し前に申しました様な耳や眼の相違に較ぶれば極僅かであり、唯斯う云ふ事があるとい

ふ事丈けを御注意して置くに止めやうと思ふ、矢張り普通の小供でも成るべくは眼も耳も働くといふばかりで無く筋肉の方の記憶も充分に出来るといふ様にしたいものである、だから矢張り小供を保育する上に於ては此筋肉に依つてやつたと能く覺へるといふ事も大變必要で例へば或線を引かせましても此線を引くのに筋肉で運動いたしました引きましますからして此筋肉の運動を能く覺へて居る小供であるならば自分の眼で此線を見ぬでも眼を閉つて居つて線を引きましてもどの位の長さを引いたかといふ事を覺へて居ればそれは筋肉に關する運動を覺へる所の個性の人と言はねばならぬ若し練習を與へれば其小供は筋肉の方で發達する事が出来る詰り調和的の發達を求めましたならばさう云ふ色々の點に注意して發達させなければいけないのですと、一つ欠けて居つても矢張り將來發達する上に付て妨げになる、成る可く色々の方面に發達の出来る様になつて居らなければいけません、

性はどうか云ふ様になつて居るか、その第一に御話
 しますのは小供が書を描くといふ場合に於て表は
 れて居ります、一つの個性に付て申しますと或小
 供は今自分の随意に書を描いて居るといふ場合に
 於きまして他の人が側へ寄つて之を見やうといた
 しますると直ぐに描くことを止めて仕舞ふ或は之
 を秘すやうな事をいたします、或小供は決してそ
 れを秘さない誰が来て見て居つても人が見て居る
 ならば得意になつてドシ／＼自分の随意の書を描
 いて居る小供があります、此二つの場合に於てま
 して小供の個性が矢張り違つて居るものであると
 いふ事を認めることが出来ます、他の人が見て居
 りまして一向構はずにドシ／＼と描く方の小供
 は是は書は餘程上手で將來餘程發達するであら
 う、或は巧みになるであらうと思はれます、さう
 共其實は決してさう云ふ譯ではありませぬ、さう
 云ふ譯にはいかぬのです、何故いけなしかと言ひ
 ますと他の人が見て居つても恥かしがらずに活潑
 にせん／＼描くといふ方の小供の描く材料はどう
 云ふやうなものを重りに描くのかと言ひますと大

抵自分が他で以て見た事があるといふ様なことを
 覺へて置いて、さうしてそれを其通りに描くので
 す、自分自ら考へ自分自ら工風して描くといふ方
 の性質が乏しくなつて唯モウ覺へて居る事をば其
 通りに再び現はすことゝが出来ないのであるから
 其描いた所の書を付て此書は自分で考へたのか何
 處かで此書を見たのかと聞きますると見た事があ
 るといふ方の答を與へる場合が多いのです、自分
 自ら工風をしないでした事にして居るといふもの
 は其小供の將來の發達は低い程度であるといふ事
 を表はすものであります、それから他の人が側に見
 て居れで却つて恥しがるとか或は秘すとかいふや
 うな事をして能く見せない方の小供はどうかと言
 ひます、唯線の引方でも何でも餘程注意をして引
 いて居る、一体の描方などが遅い、ユツクリ書い
 て居る線の引方です成る可く注意して充分に自分
 に満足出来る様に描くといふ事に付ては餘程骨を
 折つて居る、だから容易に筆を動かさないのである、
 だから其緻密な性質は餘程片方の小供よりは却つ
 て長所が多い、綿密な思想に富んで居る點に於て

は餘程長じて居るのです、さうして此類の小供は自分が見て来たことを描くとしても成るべく見て来た通り少しも違はぬ様に描きたいといふ考を持つて居る頭腦が先づそれ丈け綿密である緻密であるさうして又成るべくは自分で考へたことを描きたいといふことを求めて居る、それ丈け詰り工風力が多いと言つて宜いのです、斯う云ふ譯でありますから此個性の表はれ方に依つて保姆が注意すべき點は其活潑な方の書を描く小供に向つては必ず自分の見て覺へて居る所ばかり使はない様に緻密に能く誤らない様に描かなければならないといふ事を注意して、さうして成るべく思想を綿密にする様に致しまして且又幾分か自分の工風を描く書を混へさせる様にしなければならぬ、唯見て来た通りに描くので無く努めて自分自ら氣を附けて工風をして描くことを注意しなければならぬ、それから自分で躊躇して描いて居る小供は成るべく筋肉の運動の練習といふことを能く注意してさうして筋肉の運動が出来て参りましたと直線でも早くして適當の長さに引ける詰り熟練させる方に

氣を附けることが必要です、寧ろ此方の性質の小供は自分が工風する方に走り易いもので自分の耳にしたことを覺へて其通り描くといふ模寫的の畫は割合に好まない傾きがありませうから幾らかさう云ふ類の者はこちらから命令的に模寫的の畫を描かせるといふ取扱方も大層必要な事であると思はれます、然し斯う云ふ様な譯でありませうから同じ小供に書かせる様な場合に於きましても成るべく其個性の表はれ方を注意して其各々の小供の性質に適ふ様な取扱方をすることは概して必要です、それから第二の場合には想像が餘り多過ぎる方の小供です、想像に關しまする個性の中で第二に屬するのは餘りに想像といふものが餘計に働き過ぎましてさうして常に空想に耽るやうなさう云ふ性質になりました者を言ものであります、想像に富む小供でありながら空想に耽るといふ事はチヨツと可笑しい様に思ひますけれど共矢張りさう云ふ類の小供が往々あるものでありまして詰り他の人に向つて作つたことを多く饒舌るやうになるので自分の空想に依つて考へられたことを恰も實の

事である様に考へて仕ふ様になるのです、詰り眞
 の事實といふこと、自分の空想で以て考へ出した
 事との區別が能く附かないので、それで別段惡意
 があるといふ譯ではありませぬが唯自分が考へた
 丈けを言つて仕舞ふのです、さうして又實際さう
 云ふ様な想像に富んで居る小供でありますといふ
 と自分が唯空想で考へた事でも恰も實際眼前に歷
 々と現はれたやうに、實際有ることの如くに自分
 は思はれる事があります、

元來小供の幼稚なる時には之を大人に較べて見て
 も或は青年時代の小供に較べても少年時代に較べ
 ても概して幼稚の頃には想像の方に富んで居る者
 でそれだけ詰り精密なる智識の方が欠けて居るも
 ので、始りは極ボンヤリした智識で精密な智識に
 欠けて居る傾きがあるもので、先づ我々の發達し
 たる心から見れば大抵は想像的の事が多いやうな
 有様であります、特別の此想像力に富んで居る
 小供はどうも空想に傾いて其空想をは恰も事實で
 ある様に話をする様になつて居るのです、それで
 若し人が其小供の空想に依つて出たことをば話さ

れてさうして非常に愉快を感じて喜ぶ様なことを
 見ますると段々に其空想に耽つて居る小供は次第
 づくに人を喜ばせるが爲に誤つたことを言ふ性質
 が出来る様になつて来る、何も自分に取つてはど
 う云ふ利益がある譯でも無いけれど唯他の人が喜
 ぶのが面白といふことになつて来るさう云ふ事
 柄は抑も虚言といふことの始り、同じ虚言でも無
 邪氣の虚言でありませんがそれが若し小供は悪い心
 があつてそれと合しまするといふと今度は自分の
 利益の爲に或は自分の主人の利益の爲に虚言を言
 ふ様になるのです、さう云ふ様な譯で此虚言とい
 ふ事とそれからして唯空想に耽つた爲に間違つて
 居ることを言つたのとは之を取扱ふ上に於て區別
 を立つて置くことが必要です、虚言といふ方は是
 はモウ始めからして惡意があつてさうして事實の
 無いことを云つた場合は之を虚言と名けて宜しい
 のです、それからして惡意が無くして唯想像力の
 盛んな爲に誤つた事を言つた方はそれは誤つたこ
 と間違つたことを言つたといふ様に責めるのは宜
 しいけれど共虚言を言つたといふ様に責めることは

無いのです、元來普通の小供でも小供の時には唯今申します通りに想像力が盛んなものでありますから少し小供の固圍の境遇が良くありませぬと嘘を吐くやうになり易い傾きがあります、幼稚園の保育の上には於きましても、私共が屢々觀察して恐れて居ることは保姆自身が嘘でせうといふやうな言葉を用ゐることは實に非常にイヤな物であると感じて居る、例へば小供が或製作品を家から持つて來ます時に保姆の方でそれはドナタが御作りになりましたか、と問ひ私が作りましたと小供が答へる時に餘り良く出來て居るがそれは嘘でせうと斯う云ふ事を言ふ人が澤山ある、其言葉を聞くに誠に不愉快な感じがしますので詰り家庭の中に於ても或は幼稚園に於ても嘘といふ言葉を教へるといふ事は未だ惡意を知らない者に悪い智慧を授けると同じ様なもので詰り想像力の盛んな時代の、間違つたことを言ふかも知れぬけれども未だ嘘といふ名前を附くべき事を言ふ事は甚だ少いのです、此小供の想像力の盛んなといふ性質から考へて見ますと一体に小供を取扱います境遇を餘程氣

を附けなければならぬので例へば家庭などに付て考へて見ましても屢々見ることでありまするが客などのあります時に平生被せてある着物が餘り汚れて居るといふ考からそこで衣服などを取換へさせてさうして來客の前へ小供を出すといふやうな習慣を取つて居る家庭などがありますけれどもそれは確かに一つの悪い取扱方です一種の偽善といふことを教へる様な取扱方であつて人の前を繕ふとか人前を飾るとかいふやうな取扱方で、矢張りそれだけ人の前にも出せぬやうな不潔であるならば來客の無い時から既に其衣服を取換へさせて仕舞つて宜しい譯でありますさうで無い限りは矢張り其儘多少汚れがあつても構はずに客の前へ出す方が正當な取扱方であり、矢張りさう云ふ所で虚言の性質を養ふ様になるのです、殊に家庭の客來といふやうな事に付て一方から言へば小供の爲に大層好い經驗を興へる様な機會でありまするけれども又他の方から考へると餘程危険な時と言はねばならぬ、詰り客が來ます様な時に小供が母親などに色々な強請ごとをやる、母親は平

生自分の儀方の不行届であることを見附けられな
 い爲に一時小供の強迫に遭つて何でも小供の言ふ
 通り採用しますると、さうすると來客のある毎に
 始終小供に強迫される様になる、それから又客が
 御世辭といふものを小供に向つて言ふ、それが小
 供に對して虚言を教へる機會になる又主人の方で
 も客に對して御世辭を言ふから矢張り御世辭を教
 へて居るやうな機會を小供に見せて居る、だから
 餘程客を接待する上に於ても或は他の家に客とな
 る上に於ても此小供の爲に御互に注意する點が無
 ければならぬ、小供は初て來た客に對して羞かし
 がる時代に於ては御辭義などをしてしないのです、
 所が母親が頻に御辭義をせよと言ふ、御客の方へ
 はイエモウ遠に御辭義をなさいましたと言つて呉
 る、だから小供に嘘を吐く御手本を示す様なもの
 でありませう、だからしてどうしても想像力の強い
 時代に於てさう云ふ境遇を興へることは非常に危
 険と言はなければならぬ、今日の家庭或は社會の
 有様から考へて見ると此想像に富み過ぎて居る小
 供に對して危険なる機會は澤山にあります、それ

は餘程保育上に於ては御注意にならぬといけない
 様に思ひます、現に幼稚園にありました一つの例
 を御話しますと小供は非常に想像力に富んで居つ
 て自分が學校へやつて來る時にでも別段に自分の
 家には這入口の所に兵隊などが番をして居ること
 は無いのに幼稚園に來てから後自分の友達に話し
 て居る所を聞くと私の家の門の所に兵隊が番をし
 て居る毎朝自分と一緒に連れ合つて來る、能く事
 情を知つて居る小供にでも平氣な顔をして話をす
 るのは何の爲かといふと自分の空想の浮んだ所を
 ば恰も事實の如くに思つて其通り述べて仕舞ふの
 であります、
 斯う云ふ様な小供を取扱いますのはどう云ふ様
 にしたら宜いかと言ひますと先づ最初に於ては空
 想に耽るやうな暇の無い様にさせることが必要で
 す、それは成るべく身軀を動かして出来るやうな
 簡單な仕事を課する方が最適當である、詰り頭腦
 を節計使ひ過ぎる小供でありませんから成るべく身
 軀を動かして頭腦を餘り働かせないで澤ひやうな
 仕事を成る丈け餘計やらせるといふ事が平均を取

る方法になるのです、其他餘り頭腦を使はないが
手或は指で以てやります仕事でさうして機械的の
熟練に依つて出来得るやうな、例へば織物とかさ
う云ふ類の事はやらせても宜しい、詰り空想に耽
つて居るならば其出来上り高が少くなりすから
直ぐに認められる譯でさうして只遊ばせて置く譯
にもいさせぬから丁度始終注意は働いて居るけ
れ共空想に耽ることは出来ぬ、唯指を自分で熟練
して居る様に動かして行くことが必要であります

大器は晩成

下田 歌子

亞米利加にせよ歐羅巴にせよ今日世界に雄飛して
居る所の國の子女は十歳位迄の智識の進み方の鈍
いことは逆も我國の子女の鋭敏なるが如きもので
はない。現に小學校に通ふて居る時分でも彼國の
兒童は鈍くして我國の兒童は餘程賢しい。二十歳
になりて男子ならば中學校、女子ならば高等女學
校を卒業するかした位の青年でも彼國の人は誠に

ばやりして居りますが、日本人の方はなかく賢
いのであります、然るに二十歳より三十歳とい
ふ年輩になりますと今度は正反對の傾向を生じて
來ます。此時分には日本人は最早成業したと思ふ
て安心しますが外國人は此年齢より大に奮發心を
起して十分智能を發達せしめ、これから本當に立
派な人物にならなければならぬ。大なる研究を遂
げなければならぬと云つて大に精力を注ぐのであ
ります。而して三十歳より五十歳に及び世間に出
て盛んに事業を營り年輩に達すると日本人は之と
對抗駢進することが出來ずして負ける様になりま
す。東洋の識者も昔から大器晩成といつて居る通
り大なる器と云ふものは晩成就するものであり
ますゆゑ速成はいけません。速成のものには大器
がない。此點は世の父母教師たるものが深き注意
を拂はなければならぬ女子教養上の要訣でありま
す。
(なでしこ)

兒童の詐に就て

文學士 尾田 信忠

兒童の詐に就ては材料を集め研究せんとかねて心掛け居りしが、これまでその機會を得ざりき、然るに本年四月自らある學校に於て中學二三年級程度の生徒に對し詐るべからざることにつき講話を爲し、その要領が生徒の心情に透徹したりと思はるる頃、生徒にこれまで詐りしことあらばその場合、その實況を懺悔的に記さんことを求めたり、而してその答案を見るに生徒は最も眞面自に、最も露骨に詐の事實を記し、然もただに近頃の出來事のみならず幼時にも溯りて記載せるもの少なからず、固よりこの事に關係したる生徒の數は甚だ多しと云はれず従つてその答案に記せることにて詐の凡ての場合を包含せりと言ふ能はざれどもまたその事實の多くの年齢に亙り、少なからざる場合を含みて、頗る教育上の參考に資すべきものありと思はるるが故に、先づその答案につき見た

る所を記し、次に詐に關する教育上の注意につき余の意見を述べ、以て識者の示教を仰がんとす。
 (一)、如何なる場合に兒童は詐るか。

甲。恥づるときに詐る、或は試験に出來なるを恥ぢ、成績の悪しきを恥ぢ、無知なるを恥ぢ、その他自己の所行につき恥ぢて詐ることあり、今ここに生徒の記したるものよりその一二の例を擧ぐれば左の如し。

學校よりの通信簿の品行の所を黒く塗りて父母に見せたり。

小學校にありしとき何か宿題を出され翌日に至りて來りし者は擧手せよと言はる、余は度々出來ざることありしが、ある時(この時も實際は宿題をして來らざりしなり)若しあてられたらば口に出た通りを言はん、若し幸に當てられずにすめば出來たこととなる故、先づ手を擧げ置けば善いと考へてその場を繕ひたり。

父の歳を友人より問はれ知らざりし故にいい加減のことと言ひたり。

幾歳の時なりしか忘れたれど、寢小便を爲し、

父母に見らるれば怒を受けんと思ひ、そのまま
布團を畳み置き父母に知れざる様に爲し置きた
り。

乙。恐ろしいと思ふ時に詐る、己の罪惡につき責
られて罰を恐るる時、或は先方に打解けずして單
に恐ろしいと云ふ感じを起したる時に兒童は往々
詐るものなり、また甚だ臆病なるがために詐を來
すこともあり、これに關する例を擧ぐれば左の如
し。

高等二年の時友達と喧嘩し自身も傷を負ひた
り、家に歸りてそのことを父母に尋ねられしと
きその通り言へば叱られると思ひ、叱られるの
がこわくて轉んで傷をしましたと詐りたり。
七歳の時置時計の中に玉を入れ止まらしたり、
後父よりこれは於前の仕業ならんと云はれた
り、その時父よりの出様にては或は優しくしま
したと云はんとせしが、その時父は實にこわき
顔つきして云はれし故、前後の考も無く否と云
ひたり。
夜、用を命ぜられ他出せざるべからざる時何と

なく恐ろしかりし故眠を催ふして堪へざる如く
して就牀したり。

丙。直接に他より責めらるるにあらざれども自己
の良心に責められて詐ることあり、徒ら爲した
るとき、過失ありしときにこの例多し、左の如き
は即ちこれなり。

學校に往く途中路悪さ中に轉んで著物を汚し、
學校、井戸端にて之を洗ひぬれたまま授業を受
けたり。

或人余の家に宿し居りしが、數日の後その人家
に歸らんとせし時余は父母の命により彼を停車
場に送らしめられしが、余は遊ぶ方に熱心にし
て途中にて彼人に分れ友人と共に我家の近所の
原にて遊び、時間を計り家に歸りて用を果した
りと云ひたり。

以上の三種はその他のものに比して生徒の答案中
に記されたる例頗る多かりき。
丁。金、品物、食物をほしいと思ふ時に詐る、そ
の例左の如し。
ある中學校にありし時、學校の教科書外の參考

書を買はんとしたり、その時兄はかかる本は必要なければ買ふこと勿れと嚴禁したり、然れども余は學友の多くが之を持ち居るを羨み、遂に母を欺きて教科書を買ふなりと云ひ金を貰ひて之を買ひ、歸途計らずも兄に遭遇して事實を發見せられたり。

八歳の時尋常科二年生にて、上級の悪少年に誘はれ町端れの寺に「ヤシローモチ」として餅を貰ひに行きたり、その時一人に二個宛渡されたるが、余は尙多くを得んと思ひ悪少年の智恵を習ひ姿をかへて再び貰ひに往き見つかりたり。己の好まざることを強ひらるるときに詐る、左の如きはその一例なり。

余は入浴を好まず故に入浴を勧められたる時に入浴せざるにしたりと答へたり。

その他一向試験の際にやさしきことを人より聞かれし時にそのことを何とかひまかして答へたり一等一二の特例あれども、その數甚だ少なかりしが故にここには記さず。
(二) 詐りの形。詐りの形より詐を區別して(イ) 攻

撃的の詐(ロ) 自護的の詐(ハ) 反抗的の詐の三と爲し得(イ) 攻撃的の詐とは、悪事を達せんとするの念より始より攻撃的に人を詐るを云ふ、即ち(一)の丁項に於ける第一の例はこの中に入る(ロ) 自護的の詐とは、始より必ず人を詐らんとするにあらざれども、自己の過失、徒らにつき自己の不成績、無知等につき、不名譽を厭ひ責罰を恐るるより自護的に詐るを云ふ、(一)の甲項に於ける第一第二の例同乙項に於ける第二の例の如きは即ちこれなり
(ハ) 反抗的の詐も亦始より必ず人を詐らんとするにあらざれども先方に打解けず、先方の態度が面白からざるときに反抗的に詐るを云ふ、(一)の乙項に於ける「父は實にこわ顔つきして云はれ、故に前後の考もなく否と云ひたり」とあるが如きはその例なり。
故に詐りの念より云へば、攻撃的の詐は始より詐るなり、自護的のと反抗的のとは始に詐る念なく、ある事柄に關係して詐らんとするに至るなり、但し實際に於ては始めは、自護的又は反抗的の詐にて忽ち攻撃的の詐に變ずるものあり、その一例を

擧ぐれば左の如し。

小學校にて午後より二三の朋友と學校附近の川に至りて遊び、午後の學科を怠りて受す、貝などを拾ひ取りて面白く遊び、學科終る頃家に歸れり然るにその事ある友が我母上に申したるを以て家に歸るや大に叱られしが、我れ母に云ふに「は決してかかることをせず實際勉強せり、彼が先生に叱られて立たされ又先日余と喧嘩して負けたる故、かかることを云ひしなり」と漸く罪を逃れたり。

三種の詐の中答案に記されたるもの多數は自護的のものなり。

(三) 巧みなる假面。詐に普通なる詐と、巧みなる詐とあり、普通なる詐とは、詐る方法の一通りなるものを云ひ、巧みなる詐とは、詐る方法の巧妙にして頗る注意せる人にて往々その術中に陥るものを云ふ、この巧みなる詐に使用せらるる假面の主要なるもの二あり、一は特に善き様見せかくるにて、一は特に悪しき様見せかくるなり、生徒の答案中より前者の例を擧ぐれば左の如し。

吾等の通學せる小學校は住所より二里以上ありしが日々共に通學せる朋友はただ一人のみなりき、或る冬の吹雪の時朋友と共に出發して途中まで行きしが、原にかかりし時甚だ苦しくなりしかば、道傍の小屋に小休みせしが樂なりければそのままその中にて晝食し、午後四時頃まで小屋の中に火を焚きて遊び、後家に歸りて家人に今日學校に至りしにこの烈しき吹雪に二里以上の所より能く來れりとほめられたりと云ひたり。

小學校三年生の時、家を出で寺の庭にて軍隊遊びをなして出校せず、歸宅の後親に本日は學校にて忠孝の道を教へられたりと云ひて欺きたり。友と「ヤシヨーマ」餅を貰ひに行くことを約し友より明日は幸日曜日なれば朝五時半まで來るべしと云はれたれば常は、七時頃の起牀を五時頃下女に起して貰ひ、悪しきことと前より知り居たれば、心に咎むる所あり直ちに外へも出でず如何にも感心らしく、一たこともなき庭掃除、水汲などしてありたり。

その特に悪じき様見せかくるものは、不具者を装うて人の憫れみを乞ふが如き、繼母に虐待せられ遠地に出稼せる父を尋ねたれども父居らず、郷里に還らんとするも旅費無しなど云ふて他人の救助を求むるが如き類を云ふ、答案中に於ける左の例の如きも亦この中に入るを得べし。

七八歳の頃友と共に夕方より花火を観んがため某山に至りしが面白味に浮かされて十時頃まで居りたり、さて家に歸らんとせし時道は暗く人は段々少なくなり何となく恐ろしくなりたれば友と共に道に迷ひたる風を装ひ大聲を發して泣き通行人の注意を促し、その同情を得人力車に載せられて家に送られたり。

兩者は使用の場合同じからず、一は人に善く思はしむるときに用ひ、一は人の助を求め人の憫れみを乞ふときに用ふ、然れどもその著しき效果ありて詐の目的を達し易きことは同様なり。

(四)詐と自他、詐の自分だけに關するものと、自分以外の他人に關するものとあり、その自分だけに關するものとは「これは汝がしたのか」と問はれ

しとき、實際爲し居りながら「しません」と答ふる如きこれなり、その自分以外の他人にも關するものは、詐るに當り罪を他人に嫁するを云ふ、その嫁せらるるもの下女あり、兄弟あり、友人あり、師あり、而して如何なる場合にこれ等の人が利用せらるるかを生徒の答案中より摘出して示せば左の如し。

下女。植木鉢を破壊するとか茶碗時計を破壊するとか等の徒らを爲したる場合に下女に罪を嫁

すること多し。

兄弟。略右に同じ。

友人。授業料を失ひて友人に取られたりと云ふ

が如き、河に落ち衣をぬらしたるとき友人水を

かけたりと云ふが如き、自己の過失を覆はんが

ために友人に罪を嫁すること多し。

師。學校に行かずして學校に行き先生にほめら

たれりと云ふが如き、遅刻して歸宅し先生の補

習を受けたりと云ふが如き、即ち學校に行くこ

とを怠りし時、遊に耽り學校より歸宅の時間を

後れし時に師を利用す、この他猫鼠に罪を嫁す

ることあり、これは殊に食物に關する場合に多し、左の答案の如きその一例なり。

空腹の際菓子や戸棚より出して食ひこれを誦られし時猫或は鼠の所爲ならん、云ひしことありき。

この他口づから罪を他に嫁せざるも、自然他に嫁する様にするにあり、その例左の如し。

嘗て兄の家にて臺所にて洗面し、流しに於て痰を吐きそのまゝに爲し置きしが、遂に姉のために見つけられ家族中に尋ねられたり、その時我は姉が多くものものに聞くことなれば、自ら言はざれば現はれじと思ひ、そのまゝ黙し居て罪を免れたり。

(五) 詐に關する教育上の注意。既に詐の事實に關し吾人の知れる所を記したるが故に、以下更に詐に關する教育上の注意につきて吾人の意見を述べん。

(イ) 年少兒童は割合に正直なり、故に詐に關し注意を要せざるが如くなれども決して然らず、年少兒童は正直なれども考深からざるが故に過失

を爲し易く、又活潑なるものなる故徒らをし易く、遊を好むが故に長く仕事を續くる能はず、課業を厭ふことあり、これ等の點より自護的の詐を爲す機會少なからず、殊に成績悪しきもの臆病なるものは、その點よりまた詐を爲し易し、故に教育上大に注意せざるべからず、而して又

年少兒童の詐を矯正せざれば、漸次その惡習を増長し、且つ遂には常習的の詐癖に陥る、即ち年少兒童には自護的の詐反抗的の詐が多數にして、攻撃的の詐が甚だ少數なるものなれども、惡習を矯正せざるがため漸次攻撃的の詐の割合を増加するに至り、且つ始めは自護的、反抗的、若くは攻撃的の詐等にて詐につきさそれ、目的ありたれども、後には詐そのものが面白くなり、必要もなきに詐ること彼の狼と羊との話に於ける惡少年の如きに至る、故に年少兒童には詐を矯正することにつきて大に注意せざるべからず、子供は正直なりと油斷し居るべからず。

(ロ) 一般的に又箇別的に兒童の特性を考へて教育を爲すこと必要なり、兒童は徒らをして爲し、過失

を爲し、遊を好むことが一般の特性なり、故にかかる過失等につきては、常にあまり厳酷に叱責することを爲さず、彼等をして正直にその罪を自白し謝罪するの得策なることを知らしむべく、又ある兒童は湯に入ること嫌ふ等のこと往々これあり、これにつきてはただ強て湯に入らばと云はずして、此の如くなれる原因を明らかにし、之を救治する法を講ずること必要なり。

(ハ)年少兒童には過失、徒らを全く無くならしむること能はず、ただ之より詐に至らしめざる様注意すること必要なり、それにつきて又早く詐を發見することも必要なり、されば學校より家庭に、家庭より學校に、それぞれ通信して遅刻缺席、臨時の出來事を報ずることを要す、また兒童が常に變りて殊勝なる事を爲す場合にも全く油断し居るべからず。

(ニ)詐は往々惡友の感化によることあり、年長の惡友詐るべしと教唆することあり、故に交友に注意すること必要なり。

(ホ)貧富の程度の甚しく異なるものを同一校に置くことは兒童を詐らしむる本たることなきにあらざり、兒童は殊に他を羨望す、同學生徒が善き物を持ち居るときは、之を羨望し之を得んと欲するより詐りて金を求むることその例なきにあらざり、又同校生徒の貧富の程度甚しく異り居らざるも、華奢の風行はるときは之がため兒童に詐りの風を醸さしむることあるが如し、「オゴリ」合を爲すに必要なる金を得んがため父母を詐るに至るが如きはその一例なり。

(ト)ただ無暗に金を少く使ふ様すべしと子弟に云ふことも注意を要す、之がため子弟は表面上使用せる金額を少なき様に見せかけてその實大に金銭を浪費することあり此の如きは詐を誘起し金に換ふる能はざる品性を害することとなる(ト)點數を多く得る様、善き評語を得る様狼りに獎勵することも教育上注意を要す、兒童は一般に名譽心に富めるものなるが故に、かかる獎勵を行はるるがために實際を詐りて一時の名譽心を満足せんとすることあり、この種の弊害は

教授法に巧にして能く獎勵法を用ふる教師の教授に往々附隨せるを見る。

(チ)、平常詐る癖なき人にも危機一髪の際即ち試験の成績により及落何れにか傾かんとするるとき

若くは己の所行につき問はれ、答の仕方により責罰を受くるか否かの決定する場合には往々詐ることあり故にかかる時にも適當に身を處して誤らざる様常に指導すること必要なり。

(リ)、ある事件につき兒童に尋ぬるに當り先方にて反抗せぬ様すること必要なり、之につきては名判事が能く罪人を自白せしむる方法など參考とすべきものあらん。

(ヌ)、一般に詐の馬鹿らしきことを知らしむること必要なり、生徒の答案中に、「外國語の試験の時、一昨日とありしも一昨日の字を知らず、一の字消えかかり居たれば知らぬ顔して昨日の字にて答へたり、と記せるあり、かかる場合の詐の馬鹿らしきことは言ふまでもなきことなるが、これのみならず一般に詐は之と同様に馬鹿らしきことを知らしむべし。

(ル)、世の中一般に正直を尙ぶ風を養ひ之により兒童を教育すべし

▲九十八歳の自轉車乘 英國グレイヴスエンドのチャールズ、ジョンソンと云へるバプチスト派の一僧侶は本年九十八歳なるが今尙自轉車に乗歩き居る由にて氏が此の如く高齢を迎へて尙矍鑠たるは其生涯に曾て一回も飲酒及び喫煙を爲したるとなく絶えず自轉車にて運動を怠らざるが爲なりと氏は歐洲大陸諸國を旅行したるとあり目下希臘語の新約全書を英文に翻譯中なりと

▲馥郁たる市街 佛國南部のグラス市は人口僅に一万二千の小都會なれども香水の製造地として名高く一年を四季に分ちて一季の製造高は五百八十四万基瓦(凡そ六千噸)に上り其内二百万基瓦は橙の花より百廿万基瓦はシヤスミンの花より百五十万基瓦は番薔の花より四十万基瓦は葎の花より製造するものにして同市は四時花を以て満たされ香氣市街に溢れて實に美はしく又芳ばしき市街なりと云ふ

これのみならず一般に詐は之と同様に馬鹿らしきことを知らしむべし。

子供をして勞作を重ん

ぜしむべし

雨峰生

日本人の持つて居る缺點は幾つかあらうけれども、其の中の一つは確に勞作を輕んずる風であらうと思ひます。此の風は其の關係する所が非常に大であつて、一國一家の盛衰消長にも關係するであらうと思ひます。兎角日本人の理想は勞作とか活動とか積極的のものでなくて、安逸とか樂隱居とか消極的に傾き易い傾向を持つて居る。よもや一時勞作をなし、活動をするも、それは目的にあらず理想にあらずして、安逸を求め、樂隱居をしようとする方便、手段に過ぎない。随つて安逸を得られ、樂隱居をなし得る地位に達すれば、全然今までの方便手段たる勞作活動をすてしまつて、無事逸樂を貪る風があるやうに思はれます。歴史を緋いて見ますと、政權を得やうとつとめ、兵馬の權を得やうとつとむる間こそ、相當に活動を

なし、相當に勞作をもすれ、一旦之を得たる以上は、我が目的既に達せりとばかりの風にて、それ以上に善良なる活動をなし、善良なる勞作をなし、社會全般に好影響を與へやうと努むるものすらないのが随分目につくでありましょう、それ故に初代や二代位は其の位置を保つてが出来るけれども、永く續けることが出来ない。甚しい例になると、當代ですら既に其の位置を持ち續けることが出来ずに、事を任せたる臣下に實權を奪はれてしまふやうなのがある。吾々はどうしても是等の弊害に鑑みて、家を興し、國を興す所以の勞作を重んじ、活動を重んずるを理想として進まなければならぬ。逸樂を求め、樂隱居を理想とし、只之に達する手段方便として勞作活動をなすといふ風を廢止せねばならぬ。若しも我々の議論にして大した間違がないとしたならば、我々は幼児教育に對して、一つの要求を提出したい。それは外でもない。幼兒をして大に勞作を重んずる風を盛ならしむべしといふ事である。成る程現今幼稚園に於ては、折紙細工をさせるし、豆細工をさせるし、粘土細工

其の他種々のををさせる、小學校に於ても手工を加へておく所なども、大分多くなつて來たやうであるから、是等は喜ぶべき現象であるとして大に歡迎するけれども、まだまだ、社會の全般に此の勞作を重んずべしといふ風が瀰漫し渡らぬ以上、兒童の間に此の思想が十分にしみ渡らぬのは無理ならぬ事である。都會の少年殊に中流以上のものを伴ひて郊外に遠足を試みんか、彼等は農夫を輕蔑し、之を呼んで土百姓となし、農夫が粒々辛苦の骨折をつくして、培養したる作物をふみわらして平氣になつて居る。彼等はやもとより惡意あるものではないけれども、勞作の重んずべきを知らないから、随つて勞作する人をいやし、他人の勞作の結果を輕んずるのである。これは一例をあげたに過ぎぬけれども、かやうな例をあげたらばとても數へきれぬ程多いとであらうと思はれる。かやうな状態であるから、幼稚園なり、學校なりに於ては此の勞作の鄙しむべからざるのみならず、否却て大に重んずべきであるといふ思想を十分に鼓吹して貰ひたい。しかし、かういふ事は學校な

り幼稚園の力なりでは十分に行くものでない。家庭に於ても氣をつけて、荷も機會があつたならば、之をとらへてこの思想を鼓吹し、勞作を實際やらせて習慣とならせねばならぬ。家庭と學校と共力して事をすれば、子供に對して最も有効であるが、若しも互に相背反するやうな事があれば、當に効なきのみならず、寧ろ大害のあるものである。此の勞作をさせるに就ては學校と家庭と是非とも一致してやつて貰ひたいものである。さて今までは學校教育を受け、多少文字を讀むとの出来るものは、何事をやらせても教育を受けぬものよりは、成績の好かるべき筈であるし、又如何なる仕事にでも仕事に就くに都合好かるべき筈であるのに、却て反對の現象を見受けるのは實に遺憾な次第である。即ち學校の教育を受けたものは、徒に氣位のみ高くなつて、十分勞作に身を入れぬものもあるし、中には殆ど遊んで暮らして居るものさへある。是等は實に國家が學校を設けて、幾多の教育ある人間を出して、國家有用の材にしよつとする主旨に反するし、又各父兄が學校に送つて教育を

受けさせやうとする主旨にも反ひて居る現象であ
ると私は考へます。これはまだ勞作を重んずべし
といふ思想が、社會一般に行きわたらぬと、教育
社會にも此の思想を鼓吹するとの不足な處から、
起つて來た變現象であらうと思ひます。我が日本
の國の地位から考へて見ましても、生存競争の非
常に激しい點から考へて見ましても、これからの
日本人は、どうしても相當に教育を受けて居つて、
しかも此の勞作を重んずる風がなくてはならぬと
思ひます。さうするには、たとひ富める家の子供
であらうが、素封家の子供であらうが、自分の額
に汗して食ふの覺悟がなくてはならぬと思ひま
す。況や普通の家の子弟に於ては、申すまでもな
い事である。それゆゑ家庭及び學校などでは、是
非とも此の思想の鼓吹にとめて貰ひたいと思ひ
ます。さて其の方法は、種々ありましようが、先
づ子供をして自分の事は自分で始末させる習慣を
つけるのが第一の急務かと思ひます。然るに我が
國の人の子供に對する仕方を見るに、近來大に面
目を更めて來たにもかゝはらず、まだ十分に此の

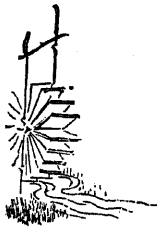
習慣がついてないやうに思はれます。また雇人と
いふやうなものがあつて、一切萬事少年子弟の世
話をするを、忠勤を抽んづるのであると心得、却
て之を害しつゝあると知らないものが澤山ありま
す。それ故に子供に自分の身の始末をつけさせる
には、どうしても雇人まかせではうまく参りませ
ん。主婦が自身受け持つに限りませす。また性急に
かやうな習慣をつけやうと思つても、出來
るものではありません。始終氣をつけて居つて永
い間にやうやう得られるものであります。また此
の習慣をつけるのは、容易なやうで決して容易な
事ではありません。主婦自ら模範を示し、實踐躬
行しなくてはなりません。若しも主婦が一切萬事
雇人まかせにしてをきながら、子供にだけさうい
ふ習慣をつけやうとしても駄目であります。子供
は非常に活動性に富んでは居るけれども、其の反
對の性質、樂を好む性質も持つて居りますから一
旦雇人を使役するの安樂なるを知つた以上は、隨
分これを應用するであらうと思ひます。次には子供
の出來る範圍の家事を手傳はせるが好いと思ひま

す。子供ははたらくを好みませすから、仕事が出
 来た時に褒め言葉をかけてやらう者なら、其の次
 には喜んで手傳を致します。何處の家庭に於ても、
 子供に手傳はせる仕事が無いといふ事は無い筈で
 す。若しも子供に手傳はせる仕事がないといふ主
 婦があるならば、其の人は教育の思想に乏しい人
 といふべきであらう。子供にそんな手傳をさせる
 のは、まだるくて面倒である。それよりか自身の
 手を下した方が大へん埒が明いて早くてよいとい
 ふお方もあらう。かういふ人は子供を教育して行
 く資格に缺乏して居るといふてよからう。一躰子
 供の教育といふ者は面倒であるべき筈だ。その面
 倒を見るのがいやなやうでは、とても子供の教育
 は出来る筈のものではない。さて如何なる家事を
 手傳はせるかは、其の家庭の状況と、子供の男
 性女性或は長幼如何によつて色々相違があらうと
 思ふからこゝにはいはない。たゞ一つ言つておか
 なければならぬのは、學校に行くやうな子供であ
 ると、學科の復習以外に自分のすべき仕事はない
 かのやうに考へて、恰も遊ぶのは自分の權利なる

かのやうに思つて居るものゝあると、父兄など
 のうちにはまたそれを當然の事と思つて居るもの
 がある事である。實に間違つて居るとの甚しいも
 のである。これは多分教育を受ける目的、學問を
 する標的を誤解したから起るとであらうと思ふ。
 成る程學校へ通つて居る間は、學問は子供の仕事
 であるから、無論全力をつくして之をやらせべき
 は言ふまでもないが、しかし學校でやる事は學問
 の總べていもないが、教育の總べてでもない。
 我々は子供が學校の事が何もかも好く出来るから
 とて、それで十分満足すべきではない。彼も亦家
 庭の一員であるから、其の家庭の一員としての職
 務を十分に盡させなければならぬ。之までがよく
 出来て、我々は始めて満足を表してよいと考へる。
 然るに從來學校に於ても家庭に於ても、此の點に
 關する注意が缺如して居たやうに見受けられた。
 されば學校を卒業したものの中に、徳富蘇峰氏の
 謂はゆる書を書く遊民がだんだんふえて行くの
 は、止むを得ぬ次第といはなければならぬ。この
 弊害を救ふには、どうしても少年子弟をして、學

校の學科を復習する傍、家事の手傳をさせて、勞作の重んずべきを知らしめるに限る。或は平常に於ては、十分手傳はすといふを出來ぬかも知れぬが、暑中休暇とか、冬季休業とか永い休暇を利用して、家事の手傳をさせ、勞作の經驗を得しめ、人間實務の一端を知らしめるがよいと思ふ。次に機會があつたならば、紙なり、絲なり、醬油なり、色々の工業製作品の製造せらるゝ有様を見せるがよいと思ふ。昔徳川光圀は侍女どもが紙を大切にしないので、粗末にして困る所から、一日暇をとらせて紙の製造所を參觀させた。侍女どもはどんなに面白い處が觀られるだらうかと思つて、多大の興味を以て行つて見た處が、面白い處か、其の製造せらるゝまでの骨折苦勞といふものは一通りでない。紙といふものはかやうな骨折の結果出來るものかといふのがわかつて、侍女どもは歸つて來て後、紙を大切に來て、光圀の參觀させた目的が美事達せられたといふ事である。我々は子供に對して此の光圀の故智を用ひるがよいと考へる。それ故に機會があつたならば之を利用し、

若し無かつたならば、子供の爲であるから、寧ろ機會を作つてまでも製造所製作所を參觀させるがよいと思ふ。其のくせ幼児に見せるには大仕掛の器械工業よりは成るべく舊式の簡單な物の方がよい。さうすると製造工業に關する智識を増すのみならず、勞作を重んじ、又他人の勞作の結果なる品物を大切にするといふ習慣を得て、一舉兩得であると思ふ。以上簡單ながら如何にして勞作を重んぜしむべきかといふ方法を説いた積りである。どうか教育の任務にたづさはつて居る人は、其の家庭であると學校であるを問はず、此の事に力を盡していただきたいと考へます。(完)



家庭に於ける趣味涵養

川口孫次郎

第五節 年中行事

イ 定期の行事

紀元節、地久節、天長節などが今少しく家庭内に於て祝賀せられ得る工夫をしたいためのである。春秋に於ける招魂祭も一般に家庭に於ても祭らるゝやうにしたいものである。

従前行はれたりし、元旦、七種、鏡開、節分、初午、涅槃、上巳、春分、灌佛、端午、星祭、靈祭、蟲干、八朔、重陽、秋分、爐開、玄猪、煤拂、除夜、などの行事の如き、背て舊制破壊熱の盛なりし時代には一も二もなく罵倒せられた者であつたが、されどそは一種の反動の結果にして、公平に穩やかに考ふれば、此等行事も一朝一夕の成立に非ずして夫々に由來がある、或ものは心氣を新にし、美の指導となり武の奨励となり、謝恩の教訓となり、或ものは宗敎心の培養となり、健康の祝賀となり、將來に希

望をかけて過去の追懐となり、以て理屈以外にさすの趣味の涵養となるものである。

其他、祖先考妣の祭なども、遠を追うて延いて以て民の徳を厚きに歸せしめんとするやうな政治道德の要求のみからではなくて、穩健な敬虔深き趣味を涵養して、大局より見たる道德教訓にもなるであらう。

苦難奮闘の記念日或は家族の誕生日などを記念することも、將來に向上し精進しつゝある者に穩健なる慰藉と奨励とを與ふることにもなるであらう。

ロ 常時の行事

○動物との近づき
家庭に於ける趣味涵養の一方法として、家畜を飼養することもよい。小犬や猫や鶏や山羊や牛や馬などを飼つておくことは、夫れ々實用の目的

ある外に利用すべき機會が頗る多い。
或は養蠶をしたり養蜂をしたり養魚をしたりすることも亦其實益ある外に涵養上に利用が出来る。或は膝にこぼした飯粒を背戸の物干臺の上に載せ

て眠懇の雀に響應させたり、素麵を箸にするに當りては先づ其二三條を泉水の錦魚に裾分させたり臺所に茄子の萼が切りはづされなれば、鈴虫に甜爪の端が出来たならばキリ／＼スに進上させたりすること出来やう。

由來、彼の犬を打つたり、猫を引張つたり、鶏を泣かしたり、蟬を千切つたり、蜻蛉を揉んだりするのは、適切に彼等腕白をして此可憐の動物どもに接近せしめないからである、若し其方宜しきを得て交際せしむれば、大人も企て及ばぬ同情を動物どもに及ぼすやうになつて來て無限の趣味を夫自身に感するやうになるであらう。動物虐待防止會の企もよろしいが、動物に接近懇親會の計畫が尙は一層必要であらうと思ふ。其手始が家庭である。

○植物との近づき

之は前者よりも一層簡易に出来る。無論植物にも觀賞用のものと實用を兼ねたものがあるが園藝などに採用するものは必ずしも彼の薔薇とか萱蒲とか百合とか菫菜とか菊とか朝顔とかいふや

うなものに限つたわけでない。今少し手近い豆なり芋なり瓜なり茄子なり大根なり小松菜なりでも其形容色彩並に成長の工合なりにワザとならず注意を向けしむれば、趣味の涵養上無限の資料を得るであらう。

動物の如くに其場所を移動せぬ爲、幼兒の趣味を動かすことは比較的に少いだらう。併し之も其周圍に居る者其の心懸け如何に依つて面白く近づくことも出来るであらう。假令ば桃を食べる、栗を貰ふ、柿が生る、梅を買つたなどいふ時には其一顆を割愛せしむる、否その種を放置せんとする際に心して後始末をさせる、約言すれば、場所を定めて植付けさせる植付けた當人が殆んど忘れて終ひかけた頃に種が割れてさゝやかな嫩芽が萌えて來る、雑草の取り除きやら、如露で半杓の水を灌かせるやら、それとはなしに働かして居る中に其嫩芽の成長の勢などに心が向いて來る。且暮に自づと足が向いて來る。

彼等幼者には立派な鉢も盆も必要ない。又與へても大人の賞翫するほど有難く思はない。彼等に

は土瓶の壞れ、碗の缺け、罐詰の殻、明瓶、螺、螺、殻、竹筒でも却て満足して居る。或見地からは幼児は全くの茶人である。それで雑草の盆栽や鉢植の立派なのが出来て當人ども恐悦至極に思つて居る。こんな罪ない遊戯から娛樂から頓てふりかへりみて、

桃栗三年柿八年、梅は酸いとして十三年(俚諺)

成程、此桃此栗は三年前に自身が種で蒔いたものであつたが今年はそれが花咲いて實が生つたか、といふ境遇に立つことになると、其處に自然の趣味が自づと沸いて来る。斯ういふ調子に向いて來れば植物との親しきは動物とのそれよりは一層清新の趣味があるやうである。動物については趣味の涵養上説明することの好ましくないと、そのころもわが、植物の方は其習性形容などが人間のそれ等と一層懸け隔つて居る丈に、罪がなくて而も想像を自由に働かす餘地が多くてよい。

山で伐る木は數多けれど

近頃、學校の講義位で美だの趣味だの聞き囁つた

者の中に、小才の利く小理屈の立つ者などは、緑蔭の林の前に立つて此俚諺を想ひ出して、切理想の美と認めて伐る木は求むれどあるやうでないものだ、といつて居る。が天然に親しみ草木の生長などに心よせし者ども眼には並み立てる一樹一株としてアダに生ひ立ちしものがなく、幾歲月の間、自然の恩恵の下に數多の辛苦を凌ぎて以て今日に至りしものなることが殆んど直覺的に映するが故に、數多き木立の中に何れを見ても之と指して伐るには惜しくて刃を揮ふ氣になれないところから、思ひ伐る氣は更にないと嗟嘆して居る、此優懷の源泉は主として家庭時代から涵養せられたものである。

若し此襟懷が養はれ来るならば、殊更に好んで薔薇を挿したり莖菜をかざして、無用の時にもハイカルやらなこともなからうし、櫻狩りや紅葉狩りに必ず折つてかざさずば物足らぬやうな未熟な願ひも起るまじく、況してや路の辻の蒲公英を無造作に下駄に踏みたくことも、他人の垣根の紫雲英を横薙にステッキにかくすることもなくなるで

あらう。

健全な愛護の心が涵養せらるれば、彼の理屈家のいふ、観察力も養はれ、智識の開発にもならずし其確實をも増すだらうし、世話する爲に進んで勤勞に従事する習慣をも養へる、少くとも氣輕く起つて愉快に仕事をすする氣風をつくれやう、繁忙の中にも胸中自づから閑日月も出来やうし、以て品性の陶冶を資することにもならうし、おまけに代呂物によりては直に相應に實用に立ち収入になるものもあらう。

ハ 臨時の行樂

家庭の仕事には何時が閑暇といつて勤勞の時間に精密に區劃を立てられないのが普通である。平たぐいへば年が年中仕事である。必ずしも學校の生徒のいふやうな能く勉め能く遊べとか、八時間は眠つて八時間は勉めて餘の八時間は遊ぶといふやうな、羊羹に尺を當て、切つたやうには行かないのが常である。其あまりに規律のやかましくない大規律の下の割合に融通の利くところ、桃源郷たり眞の家庭たる所以であらう。されば餘人は暫

くいはず、少くとも主婦たらむ人は、年が年中何異れと忙はしい、其忙しい仕事を一生懸命に着々仕上げて行くのが樂みであると感ずるやうに修養を仕上ぐる事が、何より大切である。

右の覺悟がしつかりついで、落付いて見れば、家庭の仕事が唯大體の規律の下に精細な規律を立て抜けないところに却つて面白味もあつて、工夫と手廻しとをすれば、随分餘裕をつくれぬことはあるまい。少くとも胸中には綽々餘裕が出来やう。平素其本務に一生懸命に奮勵しながら、此餘裕が胸中にあるならば、少閑に、籬の山茶花にも僅にも自適することも出来やう。半間の窓からでも奇峰崢嶸の夏雲に自適することは出来やう。夕顔棚の下にも納涼が十分に出来、椽邊に起つても觀月が遺憾なく出来、臺所からでも雪見が残りなく出来るであらう。此等の觀賞自適を取て直に健康なる趣味とはいはぬが斯ういふ心懸けが健全なる趣味の出發點であることを敢て斷言する、涵養したきは此種の源泉的のものである。右のやうに趣味の源泉が出来て居つて、年中夙

夜間断なく而も常人の眼には變化に乏しかりさう
な其實重大な任務なる内政一切を一身に引受けて
家族一同の幸福の源泉たるべく家居にのみ執筆盡
瘁しつゝある主婦に對して、家長たり家族たるも
のどもが、

草摘み、蕨摘み、櫻狩、汐干狩、蕈狩、紅葉狩、
など隨時に舉家散策する工夫をすることは、露程
も慰藉慰勞を求むる念なき主婦に報ゆる趣味ある
一方法であらう、主婦に報ゆるが即ち家族各自自
身の慰藉たり幸福たるものであらう。

二 曆の事

以上の諸項を大體の表に編製して、家庭曆とで
もいふべきものを定めてかくことも面白からうと
思へるが、更に一般に便利にして且つ効力の多か
るべく思はるゝのが、普通の曆の編纂に手加減を
加へることであらう。時日には變りはあるべくも
あらぬことは勿論なれど、彼の貳十四氣七十二候
の如き折節の移り變りにつれて天然人事の消息の
一二行を入れかくことは、趣味の涵養上輕からぬ
必要なことであらう。此點は昔のよりは今の曆に

一層缺けて居る、語を強めていへば此點丈では曆
は退歩を示して居る。

▲活動的の人と靜的の人(大隈伯書) 活動的方面
の人には靜思的冥想が大なる修養になる、靜思的方面の人
には活動的事業が大なる修養になる、活動的の人と靜的の
人も時の反對の修養を心掛けるが好い、兩面互に融合緩和
して始めて高潔偉大なるものとなる、又事業を行はんとす
るに當つては二種の反對した思想が起つてくる、一は善事
として行はんとする思想、一は名利を得んとするの思想
ある、名利の念が起きたら此の動機を一轉せよ、始めは心
中に一種の苦惱を感ずるが、打ち勝ち一轉せよ、始めは心
中には人道の點から行動し得るやうになる(活動的の友)

▲何が一番六づかしいか(全) 普通教育の知育体
育徳育の中で何が一番易いか、知識を與へることが一番易
い、其次は健康である、併し學校卒業の方で、五ヶ年皆
勤の方は何百人の中僅に何人しか知らない所を見ると、体育は
知育よりも餘程六づかしいが知らんと我輩は思ふ、全体人
間の精神が充分に活動する時には病氣は起らぬ、我輩の長
壽法も精神が支配すると云ふ主義である、徳育は体育より
は更らに六づかしい(京華校友會雜誌)

活動と元氣の養成

樂 天 子

人は感情の動物である、故に元氣を養成するの大切なるは、今更茲に云ふまでもない、凡そ人身の諸機關は、血液循環の力により生活するものなりと雖も、若しこの元氣なるもの、活動を失ふに於ては、血液の多量なるも又精良なるも、何等の効力もないのである、古への聖哲孟子も、早く既に元氣を養成するの必要なるを悟り、即ち浩然の氣を養ふべきことを云へり、身体老て長生を保つも、世界の競争場に處するに於ても、只此の元氣を鼓舞し元氣を活動せしむるの外に出でざるのである、又古人言へり、身に病ひなく、心に憂ひなき、人として過分の至樂なりと、宜なるかな人常に心を焦し思ひを凝らし、病を恐れ勞を忌み或は怒り、或は哀しみ易きは、何れも皆元氣を損じ所謂理想的、人爲的の長壽法と處世法とに背く

ものにて終には病苦の源因となるのである。憂鬱として快活なる氣力なく、顔色色なき人は、元氣の養成を欠きたるが故に病となるもの多く、病苦のために元氣を損するに至りし人は少いのである。彼の大喝一聲敵軍に突貫するは、是れ唯元氣の奮ひ發したのである、この場合に於て銃丸雨霰の如く來るも、傷者甚だ稀なれども苦し退却せんとせば忽ち身に銃丸を受くるは、戰場に於ける實例である、人に元氣の大切なる此の一事に依て實に明かである。

日常歡喜満足の念を失はざる人は、失敗失望過失悲哀等に遭遇することあるも、事理を悟り、事能を諦らめて、毫も元氣を損ぜぬのである、若し大に物に感動せし時、又は甚だしく思慮せし時は忽ち元氣頭腦に集まり、消化器の働きを失ひ、食欲の頓に進まざるは皆人の知る所である、故に學問其の他何事を成すにも一事に向つて永く精神を凝らすは元氣の養成を欲くものにして、適宜精神を檢へて活動せしめねばならぬ、世間万般の事柄をして、悉く見聞せんとするも得べからず、又

多望は勞多くして益少なければ、成るべく元氣の働きは其の區域を狭くし、我が身に關係なき事には決して心を用ひ力を勞せざる又これ元氣養成の第一要件である。

古來より常に元氣を養成するの一術として實行せる處を聞くに、先づ起きんとする前に兩足を揃へ左右の手にて胸部より臍の下までゆるくと三度撫で下げ丹田即ち臍より三寸下に氣を籠めその處を指にて押し靜かに起さるのである。又夜間寢るにも同様に行ふので之を怠らざれば漸々元氣増進して、よく物に動せず變に處して驚かざるやうになる、我が國古來より元氣の大切なるを知ること此の如くである、或人この事を怠らず行ひしが、我元氣の丹田に籠めたる量を試みるとし、自から平臥し人をして丹田に踏乗らしめ氣を籠めたるに人体に堪へ得ること數分間であつた。さればこの一法は、血液の循環を助け元氣を増大ならしむるの一大簡便法であれば、宜しく習慣として實行を進むるのである。

少壯の元氣は活潑にして、放逸に流れ易きを以て

之を戒しむるの方法を設け、老年の元氣は、沈重にして保存の一方に傾む易きを以て、之を養成するの道を立てねばならぬ、兎角壯者と老者との衝突あるは、活潑と沈重との相容れられざるにより、遂に老者は壯者を頼みにせず、壯者は老者を顧みざるやうになる、世人よくこの法を察しこの道を行ふに至らば、常に元氣の活動宜しきを得て平素事にわたりて煩悶せず、樂しく面白く此の世をふくることが出来る。

▲日本の障子(小池醫學博士) 日本の障子は衛生上に非常な利益である、硝子障子は少しも換氣せぬが、紙障子は盛んに換氣を營んでも隨さま風を起さない、障子の紙を顕微鏡で見ると細微な孔が數限りなくあつて、其の孔が不規則に屈曲してゐる、それで濾水器で水を濾すと同じに室内には入つてくる空氣を濾し、バクテリアや止め清潔にする力がある、其の成績は美濃紙よりも半紙の方が好い、西洋では專賣特許などと稱へて賣出してゐる空氣濾し器よりも日本の障子の方が効能が多い(大和なでしこ)

余がノート(二)

大元茂一郎

一一 先生もいひました

「先生、たくさんかくのですか」と余が讀方の時間にかき取りの書取を命じた時尋一生の多くが問ふた。余曰く「ウンさうです」。しばらくして「皆さんたくさんかけましたか、石盤をお見せなさいといふと、○村とい、女生、よくも出来面白い生徒……彼れ曰く「ウン出来ました先生出来ました」

そこで余は「女子がウンなんていやですよ」といふと、彼れ更に曰く……「先生も先にウンつていひました。」

余はこれによりて教師の一舉一動は彼等の模範たるべくつとめなくてはならぬ。殊に幼年生に於ては……との教訓を得たのである。

一二 とうちやん! そんならこれは?

之れを我朋友にきく。曰く、四歳になる男の兒このひろ智識欲が大分發達して來て色々のことを問ひ

だした。それにつきて餘程注意をして居なくてはならぬことになつたと。

或時も繪本を出して來て一々コレハコレハとその名をきくので最初は一々正直に教へたが、多忙な時にはうるさいといふのでコレハといふと、それはA。コレハ……それはB。コレハ……それはC。かくの如くやつてのけた。所が繪の種類が異つて居た間はA Bで承知してゐたがCがAと同じものであつたので男兒中々承知しないで、Aをまた指して、とうちやん!! そんならこれは?。

そこでとうちやんは到頭閉口してしまつたのとこ

一三 アナタお起きなさい!!

これも前の友達のはなしである。その男兒が父母の言語を模倣すること甚しく時にはふき出すところがあるとのことである。その一例として曰く。遊んで歸ると母にひかつて「オイ足ふけ」……といふ。オイとは父が母をよぶのをさいてまねたものである。又一日母の命によりてその男兒父の午睡してゐるのを起しに來て「アナタお起きなさい!!

「アナタお起きなさい」といつたさうである。アナタとは誰の口調……。

一四 米屋の奥さんになりすすよ

兒童の理想とする所誇大なるが通例であつて大將だとか大臣だとかエライ人だとか随分氣焔を吐くものであるが、我軍級の兒童は彼等の境遇上より來るものか氣焔がわがらない。一方からいへば實着とでもいはれやうが余は意氣なさに力を落すこともある。彼等の理想とする所は丁稚、給仕、女中、女かみゆひ、八百屋……先生先生と意氣昂然舉手したる男子の答は如何。曰く電車の車掌！。劣らじとニコニコとして指名を待てる女子の答は如何。曰く「先生私は米屋の奥さんになりすすよ。あゝわはれ。」

一五、六ですよー先生！

尋一生に一三三と常用數字を授け四にうつる時に四は如何に書くかと問ふと二二とかくと答ふるものあるは此迄屢々経験した所である。此度は如何にと思つて四を授くる時に「皆さん四といふ字がかけますか」といふと楓葉の如き手を

わけて「先生かけます先生かけます」といふ。ならばないでも？といふと「先生かけるんです！」そこで二人出して書かせた。一人は四とかき一人は二二とかいた。

「皆さんどちらがよいのですか」といふと。まぢまぢ、級決をすると四の方が多かつた、余も四を採決した所が二二の賛成者は中々承知しない。

「一は一本、二は二本、三は三本ですから四は二二と四本がいいのです」

「先生四は(一)(二)(三)(四)(五)——(六)一と六になりすす」

「さうだワ……先生六ですよー先生！」

と手を拍つて追つた。兒童愛すべし。

後者の六になりすすは何故にかく答へしかといふに余が文字教授に一畫毎に一二といふ様にならへしめて居る所から來たらしい。

一六 先生御機嫌やう。さよなら。

夏季休業が明日からといふ今日例の終業式があつた。式後教室で通知表をわたし更に休業中の心得の概略を念のためくりかへして教室を出して彼等

が歸るのを見送つた。

毎日毎日やかましくいつて居か余も明日からは

れないと思ふと何となくかなしいやうで……子供

等が「先生さよなら」「先生さよなら」「小さい頭を

さげて行くを見ては猶更であつた。

この時尋二の男女二生、余の控室の戸の所へきて

プツプツ……「いはうや」……「でもはづかしいも

の……」「かまやしないよ」……やがて戸を開いて

二人が口をそろへて、

「先生おきけんやう。さよなら」といつて、ニコニコ

して走つてかへつた。

洗濯の仕方

丸山芳子

一口に洗濯といへば、絹布も木綿も一様に石鹼

や其他のものを附けて手で揉むものゝやうに思は

れるか知らないが、それは決して爾うでない、絹

布類のやうな薄い地のものは、爾ういふ事をすれ

ば一度で忽ち地質を傷けてしまいます。でありま

すから絹布類は手を以て揉むべきものではないと

心得て居れば宜しいのであります。之に反して木

綿の類は兩手で揉むのでありますけれども、その

揉むにも揉みやうがあつて同じ揉むにも兩手に餘

り力を入れないで、布と布とが軽く當るやうにし

て揉まなければならぬものであるのに、急に奇

麗にしやうと思つて、力任せに揉む方などが何う

かするとあるのであります、其様な事をします

れば、垢の落ち方が斑になるばかりでなく、第一

自分の手を傷め刺へ布帛の地質を損するから、そ

れを再び衣服等に仕立ますと、何うしても其所か

ら早く破れるのであります、一體洗濯といふもの

は爾う性急にすべき者ではありませぬ、所が往々

之を早くして仕舞つて、次に何々といふやうに焦

慮つて、大部當時流行の洗濯板と稱するものを用

ゐらるゝやうだが、之を使用するにも敷布とか寢

衣とかいふやうなものは關ひませぬが、品により

ては決して用ゐてはならないのであります、何故

なれば、布帛の地質を損するからであります、地

質を損すれば、ツマヤ三年使用に堪へるものも、

一年か半年しか役に立ぬとになるのであります。

夏の月

かはぐち

明石土産に、拇指の辛つと這入る位の大さの可愛陶製の壺を呉る。見ると其可愛の壺の縁に蝟が一匹外側からカラまつて居る。更に注意して見ると、壺の外側に「や」の字が大きく筆太に書かれて居る。尙ほわざわざ讀をすると、「はかなき夢を夏の月」の九字が見えて來た。イヤこいつには擔がれかけたと我ながら悦に入つたことであつた。

實際に、蝟を獲る壺も全く型があゝの通りで、唯大きさが違ふまでのことである。通常の蝟壺は徑六七寸高さ小一尺位である。その壺の頸をいはへて其一端から五六尺隔て、又他の壺をくゝりつける。斯ういふ工合に一繩に大凡五六十個もつけておく、之に桐で作つた浮標が長い紐付で付けらるゝ。斯いふ蝟壺の珠數繫の繩を幾條も用意して、小舟に積込み、蝟の來往徘徊する場所に漕ぎ

出て、片端から此蝟繩を沈めておく。すると、蝟共、例の調子で呑氣に餌食を漁りに出懸けてくる。蒼空に流星が飛ぶ時のやうにあの胴の筒を先きにして八手を後に流したやうな振りで、フラリツツ、ヒョイツツと泳ぎながら彼方此方とさまよつて居る中に、不圖、例の蝟壺を發見する。近寄つて内を窺へば、誠に蝟君達には持つて來いともいふべき住宅である。廣海にも此様な頃合な家は今までには見付からなかつた。例合あつても他に同志間にも競争者があつて程よく専用することが出来なかつたが、長生すれば幸なこともあるものかななどと、シタリ顔に壺の中に這入つて見る、又出て見る、誠に自由自在、餘程此家の設計には骨が折れたらう、何しろ便利に出來て居ると、到頭、蝟君一人で一壺を占領する。之にて敵の來襲の心配も先づなくなつたし、新宅の移り心地もよく、何時しかウツラ／＼と夢路をたどる外面は夏の夜の月に照されて海中ながら明るくてすが／＼しい、早や曉け方に近いらしい。右のやうに新宅にありついた蝟君は決して一人

や二人でない。何れも大恐悦で夢をみて居る、頼母しい夢をゆめみて居る。

此新宅、而かも五六十軒も近所に俄に出来た新宅が、一晝夜を経た後に、意外にも地震の爲か何だか動くやうに蛸君に感ぜらるゝやうになる。段々と手荒く否最初から可成亂暴に新宅を揺すり始めるものがあゝる。『夢驚かす狼藉者、扣へろ！』とタシナめても何の甲斐もない。霜を僧門にかける彼蛸君若し執着の汚漬を去り瓢然と雲水に身を委ぬれば廣き海原が唯彼のまゝなるべきを、さりとては之も浮き世なるか、蛸入道非常の立腹、唯今の申渡し相分らず尙は殿堂をゆすぶるに於ては、此方にも相應に覺悟ありて、眞赤となりて其八ツ手を張つて壺の内側より張り裂けんばかりに踏み張り居れば、何時しか壺は水面まで引上げられて漁夫どもの噓々の聲が手にとるやうに聞ゆるやうになる、後れたれども此時尙は勝手次第に壺から逃げ出ることが出来るのに、蛸君益怒つて頑張り居るが爲に到頭漁夫共に壺諸共に安々と船の内に引上げらるゝ、誠に自繩自縛で、自から好んで漁

夫の籠に入る次第も氣の毒にも又滑稽の至である。明石舞子から泉州沿岸にかけ紀淡海峡まで青松白砂の津々浦々に、此蛸壺の廢物が彼方此方に轉がつて居る、其牡蠣などの附いたのを花瓶にそのまゝ利用した人もある。一間床以上の床の間にならば恰度頭合なものである。

吾輩も始めて聞いた時には、實は聊か驚いた、それは蛸が陸上を駆足で走り廻はることである。泰平の春三月、天氣のノツテリとした日に、海岸に開いた褐色な畑地に春蕎麥の花盛りを見付けて彼章魚共物辭かに磯の岩から匍ひ上つて、頓て彼の短からぬ手を出して蕎麥の花を片端から何とも挨拶せずに頂戴することが往々ある。人間共が來る氣合がすると彼等は八足で逸目散に走り出して海に逃げ込むとの話であつた。

そこで又蛸壺の應用が始まつた。併し陸上で應用する壺は少し違ふ、第一海のは素焼でよいが、陸では褐色の釉を塗つたスベークしたのでなくはないが、陸で用ふのは少くとも尺餘はなくては

ならぬ、此陸上用の蝸壺を例の蕎麥畑の畔に、壺の縁邊が地面とスレ／＼になる位、否地平面よりは多少低い位になるまでに、壺を地中に上向けに中を空にして埋めかくのである。そうすると蕎麥喰ひに來た章魚共の中で、呑氣な奴は物好きに飛び込んで休息し、さもなくとも蕎麥の御召し上りの眞景中、御無禮ですがとも何ともいはず人間共が不意討に現はるゝと、蝸君もさるもの、左様安くは命を進上出來ぬ、と駈出し、早速の利用、調法至極と、例の蝸壺に一気に駈け込む否落ち込むのである。自から好んで入つたにしろ、追はれて入つたにしろ、何しても入足から先きに入つて而も内部は平滑で何とも力の入れどころがない。何處かに手をかけて身返りしやうにも丸で所謂手懸りが無い、シレッタいとか、モドかしいとかいふのは此様な場合の心理状態をいふのであらう、海に壺では何時でも逃げ出ることの出来るのに、蝸君達は「海は我本家だ、誰が本家の本家の此壺から出るものか」と自から威張つて遂に人に攫まれ、陸の壺では流石に一時の宿りと自覺して早

速に逃げやうとしても内が滑かたで且つ深さも遙かに違ふので、萬一手出が出来ても壺の縁まで届かない。結局、人間奴に笑ひながら生捕らるゝので蝸共非常に悔しがるといふ噂である。併し此壺から蝸共を出す時、大抵の素人は往々蝸共に逃げらるゝ。何故なれば、棒で突かば棒について上つて駈け出すし、手で攫めば甚だしく例の吸盤で吸ひ付く吸付かれては、痛い苦しい問題は切あき、第一何だか心持の工合のよくないことが世界無類である。斯うなつては蝸の逃げるも何もあつたものでない、寸刻も早く振り拂つてしまひたくて人間が狂ひ出すからである。それで大抵は割合に丈夫な棒で、狙つて先づ蝸を突く、突いたら八足でしがみ着く、着いたら早速引上げてそのまゝ力に任かして岩なり地面なりの堅い面に投げ付けて、先づ弱らして、籠に入るゝのが普通の捕り方である。熟練な漁夫になると、手早く蝸の筒即ち腹のあの袋形になつたところを、クルツとヒツクリ返すのである。斯してかかば海へ放しても最早自から逃げるを得しないで、ユラ／＼足ばか

りふつて居る。

飽浦崎の内側即ち加太浦の一方に、岩角の現はれた磯がある。其處で女小供が最も簡便に蛸をとつて居る、其法は細いステッキ位の棒一本で岩の罅隙を窺つて片ツ端から突いて見る。水深僅か一尺以内のところでのこと故、蛸君居らば直ぐわかる。見えなくとも手ゴタへで直ぐわかる。ステッキで突かれたら蛸君さつと怒つて、其ステッキに緊つかりとしがみつゝ突き方が酷いほど、棒にからみ付き方もひどいさまつて居る。其十分からみついた一瞬に、颯とステッキを引上げれば、呼賣が裏店の小供に賣る棒の先なる飴よろしくで、ステッキの先きに蛸奴、しつかりと自分でからみついて来る、そ奴を力任せに岩の上に逸早く投付けて扱て籠の内に拾ひ込むのである。尤も斯ふしてとらるゝ奴は大抵小さなものである。

其小さな奴でも、よく注意すれば小さいな上に匍ひ上つて居ることもある。殊に彼等には鳥賊ほどの『黒べ』がないから其代り保護色の變りが

頗る著しい、全體骨なしでアバレて廻はるものにはそれ相應に利器もあるものかな。水に居る時は水色となり岩に據れば岩色となり陸に上つて小岩に憩へば其岩の色に即座に變る。従つて敵には殆んど見付からぬので得意になつて休息して居るこ

とが往々ある、今一つの武器は前にも一寸いつた例の吸盤である。八つ足の各足に二條の並行せる吸盤の列がある。あれで以小さな貝なら握り詰めて殺して食つて終ふ。蓋の丈夫な貝なら、その蓋のところの吸盤を宛て、吸ひ出し窒息させて、氣息が絶え蓋が弛めばそろ／＼中實を頂戴にかゝるのである。

大きな奴になると、漁夫共も厭がる、屈強な男盛りの漁夫でも大きな蛸に片腕丈に捲き付かれたら大抵は往生する。それで漁夫共は沖の小島に上る際などは、先づ其船から飛び移るべき岩の面をよく檢視した後でなければ動かない。之は大抵蛸入道が岩の面に眼の球キラリと輝かし、全身岩色になつて岩に休んで居る危険が出る爲である。鰐や鮫が沖で船から漁夫を喰へて海に引込むことのある

るのは誰も聞いては居るが此蛸の大きいものになる
と、性がわるい。舢に手をかけて他の手で漁師を
捲き込むといふコスイことをする。元氣な漁夫は
逸早く權や桿をもつて、内に潜んで外から来る手
をイヤといふほど一氣にやつつけて、ひるむとこ
ろを此方からあべこべに抛り据えて捕獲して来る
さうである。

全體、海で性質のよくないのが、此蛸と鯛とで
あつて、何れも人を噛りたがる、だから海難の際
に第一に喜んで来るのが此二者である、潜水夫等
が引上げ工事や探索仕事などに潜り入つた時に厭
なの先づ此二者であるさうだ。殊に裸で潜り入
る海藻採りの海士などの働いて居る手に平氣で噛
み付きに来るさうである、殊に蛸に至つては夜陰
に乗じて、海濱近くの墓地などあると如何にして
知りしか、兎に角匍ひ上りて来て徘徊搜索するこ
とが往々ある。事情を知らない者は塙所が塙所故
随分震はせらるゝことがあるとのこと。何にして
も大きい奴はいらんことをやる。君子は庖厨を
遠かる、嫁遠目傘の中、丸で知らないのも困るが

事によつてはあまり詳しくすぎるのが却て困ること
もわる、これ以上の話は遠目にながめて居らるゝ
方が結構だと思ふのが、強ち蛸君ばかりでもある
まい。

石見の國は濱田の町と彼日本海々戰の砌敵の敗
殘特務船が漂着した地點との恰度中程に當るとわ
る海岸で、此二年ほど前の夏の或日、午後二時の
眞たゞ中に、非常な爆發があつた。誠に天地震動
する爆發であつた。村人は殆んど腰を抜かさんば
かりに仰天せしめられた。やつこのことで濱邊に
出て見ると、磯馴松の枝までが手ひどく引裂かれ
て居る、網納屋が横に抛れて傾いて居る、捨小舟
が寸断々々に千切れて居る、突出した巖角が大き
く裂けて微塵に碎けて居る、海には泥濁りが大ゆ
れに渦巻いて、魚族の仆れしものが波際にさへ散
亂れて居る。丸で大海嘯の跡のやうな光景である
更に驚かされたのは、其碎けた小舟の彼方に屈強
な男が一人、裸のまゝで仆れて居る光景であつた。
早速に駆け寄つて見れば見覚えある村の潜水夫
であつた。早や全く絶息して終つて居る、併し幸

なことに全身に致命傷と見るべき重傷も負ふてゐない上に、また体温は少しはあるやうであつた。追々に寄り集つた人々の中に氣の利いた者もあつて、人工呼吸法を施すこと殆んど一時間、幾度か駄目と諦めかけて尚ほ一縷の望を囁して盡力したる一時間の後に、やつと息吹き返して、運よくも復た此世界に蘇生つた、其潜水夫の直話を程經て聞いて見ると下の如くであつた。

最初は全く和布採り、方言でいへば目の葉採りに、單に出懸けて磯の巖角から徐ろに泳ぎ出て、潜つて入つて、七八尋から十尋前後の海底で、とある小岩を腰掛同様に身を凭らして、片手に他の巖角を握りて浮き上らないやうに身を扣へながら他の手の鎌で搔き切つて居る、其柄尻が自分の腰掛にドンと當つたが、何だか當りがやさしい。之は不思議だと殺急の場合よくは見なかつたが、今迄小岩と思つた真黒なのが見る／＼真赤になつて來た。同時に水夫の顔が真蒼になつた、其矢先に早や足下の方の海藻の間から大きな真赤な入道の手が上向いて現れて來た、氣も轉倒せんばかり

に水夫が、命から／＼逃げ出して泳ぎ上る、その後を、大蝸入道颯と出發して追かけて來る。双方全速力、水夫は逆もかなはない。唯入道の泳ぐや常に八脚を後方にして坊主頭の腹部を先頭にして居るから追付いても、直ぐ水夫を攫むことが出来なかつた爲に、水夫は辛うじてつかまらないで、磯近くに逃げ寄つた。慌てた九死の場合誤つて濱の砂場の方向に頭が向いたが最後、入道の手の一本が水夫の肩に懸つた、絶體絶命、藻掻きにもがいた其片腕が文字通りに藻を搔いて、引付けて小楯にとれば、何んでも直徑四五尺もあらむ一と束。之れ幸と蝸と己との前に此固まりを隔てに入た。此時、入道早速に、此換玉に其八脚でムンツと獅噛みついた。積もる鬱憤、目に物見せて呉れんの勢其換玉を縦横無盡に振り廻して居る入道を、後目にかけて、やれ助かつたかと逃げ出したまでは覺えて居れど、その後一切覺えない。病床で療養中人から話されて我身が濱に打上げられたのを知つた位である云々。

こゝまでの口供と、濱邊の被害とにより、彼水

夫が苦しまぎれに小楯にとつた海藻の一本と見たのは、中實が随分堅い代呂物、その代呂物の處々に出ボがある、最初はイヤといふほど振り廻して居つた入道も熟々惟みればドウも人間共の珍重する金米糖であるらしい。獨りでやるには何だか惜しいやうだが、併し遠慮は開けた世の中に却て先方に迷惑を懸くる次第、イザ然らばと、八脚で緊平と抱えながら其一角をカチリツとかぶりついたが最期、誠に天地顛倒の大爆發、それがドウやら世にも厄介千萬な浮流機械水雷であつたらしい追ひかけられた水夫は運よく助かつたが、強慾な蛸君は思ひ切つて散つてしまつたらしい。

料理

蒟蒻料理

石井泰次郎

◎味噌煮のこしらへ方

(原料) こんにやく一挺 (東京製は長五寸、幅二寸三分、厚さ七分五厘、重さ六十匁くらゐ) 鹽

三匁胡麻油二匁、醬油二匁、白味噌二十匁、葱一本、かつを煎汁五匁、砂糖二匁、

こんにやくを洗ひ、茶碗のふちにて押し、ちぎりたる如くに、小さくかきとりて鉢などに入れ、鹽を入れ合せて手にてよく揉み、水にてよく洗ひ湯鍋の中に入つし、五分間湯煮して箆にとり上げ湯を切り、布巾にくるみて、よく水をぬぐひおく。鐵鍋に、胡麻の油を少し入れて火にかけ其中にこんにやくを入れて、よくいため、次に醬油を加へてなほかきめぐらし、よく染みたるをふるして網などの上にあげ置く。

白味噌を、搦鉢にて搦り、馬尾節の裏にのせて、木杓子にて漉し、葱を水にて洗ひ、小口切に薄く切り、これも搦鉢に入れて、すりくづし、鍋に、右のみそを入れ、葱を加へ、煮汁を入れ、木杓子にてとかし、砂糖を入れて火にかけ、こんにやくも合せ入れて煮る。ねぎも煮えたりと思ふほどにして、鍋をおろし、器に盛るべし。

又ねぎは搦りませず、小口切りにして、盛りたる上にのせても出すべし。

◎鳥もどきの拵方（こしらへかた）

（原料）葛蕪一挺、鹽三匁、小麥粉十匁（四合にとかす）、胡麻油一合餘、醬油三匁、みりん酒三匁、砂糖一匁、

こんにやくを洗ひて、板の上に置き、搦粉木にて打ち、中くづしにして、それを前の如く、茶碗のふちにてかさちぎり、鹽にて揉てよく洗ひ、湯煮五分間して取り上げ、筆を切つて布巾にてぬぐひ、小麥粉を鉢に入れ水にてとかしたる中に入る。鍋に油を入れ煮立てたる中へ、右のこんにやくを、箸にて一つ一つ小麥粉をつけて、搦み入れてあげ別の鍋に、醬油とみりん酒と砂糖とを合せて汁をつくり、其中へあげたるこんにやくを入れて、箸にてかさまはしつゝ煮て、皿にとり、胡椒の粉、又は生姜のしぼり汁をかけて出すべし。

◎そぼろの拵方（こしらへかた）

（原料）葛蕪一挺、鹽三匁、胡麻油一匁餘、煎汁五匁、みりん酒一匁、砂糖三四匁、醬油二匁、葛粉三匁（水一匁にて溶く）わさび半分、葛蕪を洗ひて、薄く六七枚にへぎ（三つ四つ位に

切り、それよりへぐべし）それを重ねてせんに切り、鉢に入れ、しほを加へて手にてよく揉み、水に入れよく洗ひ、取り上げて水氣を布巾にぬぐひ取り、油にていため、再びそれを水にとりて洗ひ、鍋に入れ、にだし、みりん酒、醬油等を加へ火にかけて煮る。
煮え上りに、葛粉の溶きたるを入れて、箸にてかさ合せ、煮えたらばすぐに鍋をおろし、小鉢などに盛り、わさびのふるしたるを、一つまみ添へてすすむべし。

本號にはお伽噺を入れることを怠つて申譯がありません來號以下精々奮發して毎月二つ位づつは必ず入れる積りで御座いますから御容赦を願ひます。（記者）

月刊産科婦雑誌

購読希望者は日本産科婦協會員となり
一ヶ月分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に九年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見えんとす産科婦雑誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むべからず二段組十八行の植字は自ら内容の豊富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては窃に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ

(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尙高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむることに試験準備の諸姉に對しては無二の良師友と謂ふも強ち誇大に非ざるべしと信ず

明治四十一年六月

發行所

日本産科婦協會

東京市日本橋區濱町三丁目七番地
産科婦人科補田病院内

(電話浪花一六〇番)

フレイベル會發行

幼稚園遊戯

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてであります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尚本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレイベル會發行

幼児談話材料

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

●●豫約募集●●

フレイベル會編纂

幼稚園遊戲的 手工圖形

定價

金壹圓五拾錢

郵稅

未詳

右は主として幼稚園に於ける手技及小學校の初學年に使用せらる可き手工の圖形參百餘個を蒐集したるものにして新教育主義の實現上必要なる教材書なり。本會は特價金壹圓を以て五百部を限り豫約募集す希望者は至急申込む可し、但し應募者既定數に満たざる時は出版せざる可し。

東京女子高等師範學校内

フレイベル會

明治四十一年八月